

「底が突き抜けた」時代の歩き方³⁴⁸

「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない。もし私が人間であるなら、あなたは人間ではない」 - 単独者としての 位置 の明確さ

作家の関川夏央が日本人拉致問題に言及して『文藝春秋』(02・11)で、ハルピンの特務機関に軍属として勤務していたが故に、「反ソ行為」の罪名で重労働25年の刑(事実上の終身刑)を宣告されて、ラーゲリに送られた詩人の石原吉郎に触れている。彼はスターリン死後の53年暮れに舞鶴に復員した。

《シベリア抑留者を「アカ」として差別する日本社会に幻滅した石原吉郎は、ハルピンでの同僚であり、収容所の中で偶然出会った鹿野武一の言葉をしばしば苦く書きしるした。それは生存への執着を捨て去ったかと思われる鹿野武一が、不条理きわまりない環境にあって党員の取り調べ官に対して発した言葉であった。

「あなたが人間であるなら、私は人間でない。私が人間であるなら、あなたは人間でない」

私は永く、金正日を異常な人間だと考えてきた。労働党を異常な人間の集団だと考えてきた。それは北朝鮮の歴史と現状を見れば明らかなことであると思われた。しかし私は間違っていたと9月17日の夕刻痛く感じた。私がもし人間だとするとなら、金正日は人間ではないのである。私たちが人間の集団なら、労働党は人間の集団ではないのである。》

いま関川夏央の文章を引用するのは、彼が引用していた鹿野武一の言葉 - 「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない。もし私が人間であるなら、あなたは人間ではない。」に私自身ずっと引っ掛かってきたからである。この言葉は石原吉郎のエッセイ『ペシミストの勇気について』の中に見出され、初出は『思想の科学』(70年4月号)であり、そのエッセイは『望郷と海』(72年12月25日刊行、筑摩書房)に収録されている。おそらく私たちはそのエッセイ集で鹿野武一の言葉に出会った筈である。最初に目にしたときから、そのあまりにもシンプルな言葉はそのシンプルさ故に、私の脳裡の奥深くに巣くってしまったように感じられた。この言葉に私は、人間とはなにか、という茫漠とした問いを見出し、その言葉が発される場所というものにずっととらわれつづけてきたように思う。なぜとらわれるのだろうかという自問と共に。

その後、何度かいくつかの文章の中で引用されているのに出会ってきた。そして30年後のいま、思いがけなくも拉致問題に言及する関川夏央の文章の中で出会うことになったのだ。それも言葉のみが流通されているという最も無縁な私たちにとって。ここで鹿野武一によって発されることになる言葉の状況について、石原吉郎の『ペシミストの勇気について』を辿りながら考えてみる。ソ連の苛酷な強制収容所を生きのびてきた日

本人の精神状態のありようについて、こう述べている。

《入ソ直後の混乱と、受刑直後のバム地帯でのもっとも困難な状況という、ほぼ二回の淘汰の時期を経て、まがりなりにも生きのびた私たちは、年齢と性格によって多少の差はあれ、人間としては完全に「均らされた」状態にあった。私たちはほとんどおなじようなかたちで周囲に反応し、ほとんどおなじ発想で行動した。私たちの言動は、シニカルで粗暴な点でおそろしく似かよっていたが、それは徹底した人間不信のなかへとじこめられて来た当然の結果であり、ながいあいだ自己の内部へ抑圧して来た強制労働への憎悪がかろうじて芽を吹き出して行く過程でもあった。おなじような条件で淘汰を切りぬけて来た私たちは、ある時期には肉体的な条件さえもが、おどろくほど似かよっていたといえる。私たちが単独な存在として自我を取りもどし、あらためて周囲の人間を見なおすためには、なおながい忍耐の期間が必要だったのである。

このような環境のなかで、鹿野武一だけは、その受けとめかたにおいても、行動においても、他の受刑者とははっきりちがっていた。抑留のすべての期間を通じ、すさまじい平均化の過程のなかで、最初からまったく孤絶したかたちで発想し、行動して来た彼は、他の日本人にとって、しばしば理解しがたい、異様な存在であったにちがいない。》

苛酷な環境の中であっても、人間は本能として生きのびようとする。心身が凍結されていればいるほど、生きのびようとする唯一の意志は剥き出しになってくる。个性的であることが一切剥奪されている環境にあって、誰もが生きのびようとする本能に心身を委ねてしまうことは、人々を「ほとんどおなじようなかたちで周囲に反応」させ、「ほとんどおなじ発想で行動」させるばかりでなく「ある時期には肉体的な条件さえも」、「おどろくほど似かよっ」たものにしていく。ところが、鹿野武一だけはちがった。石原を含む他の日本人が、《なお生き残る機会と偶然へ漠然と期待をのこしていたのにたいし、鹿野は前途への希望をはっきり拒否していた。》

そのような鹿野の姿勢を石原は《明確なペシミスト》と規定するが、ソ連の強制収容所でも最悪の環境に属するバム地帯でペシミストであることは、他の者より生きのびる機会が減少することを意味する。《ここでは「生きる」という意志は、「他人よりもながく生きのこる」という発想しかとらない。》からだ。《なまはんかなペシミズムは人間を崩壊させるだけである。ここでは誰でも、一日だけの希望に頼り、目をつぶってオプティミストになるほかない。（収容所に特有の陰惨なユーモアは、このようなオプティミズムから生れる）。そのなかで鹿野は、終始明確なペシミストとして行動した、ほとんど例外的な存在だといっている。》鹿野がどれほど勇氣あるペシミストであったか、石原は後に知った一つの例を挙げる。

《作業現場への行き帰り、囚人はかならず5列に隊伍を組まれ、その前後と左右を自動小銃を水平に構えた警備兵が行進する。行進中、もし一步でも隊伍を離れる囚人があれば、逃亡とみなしてその場で射殺していい規則になっている。警備兵の目の前で逃亡をこころみるということは、ほとんど考えられないことであるが、実際には、しばしば行進中に囚人が射殺された。しかしそのほとんどは、行進中つまずくか足をすべらせて、

列外へよろめいたために起っている。厳寒で氷のように固く凍てついた雪の上を行進するとき、とくにこの危険が大きい。なかでも、実戦の経験がすくないことにつよい劣等感をもっている17、8歳の少年兵にうしろにまわられるくらい、囚人にとっていやなものはない。彼らはきっかけさえあれば、ほとんど犬を射つ程度の衝動で発砲する。

犠牲者は当然のことながら、左と右の一行から出た。したがって整列のさい、囚人は争って中間の三列へ割りこみ、身近にいる者を外側の列へ押し出そうとする。私たちはそうすることによって、すこしでも弱い者を死に近い位置へ押しやるのである。ここでは加害者と被害者の位置が、みじかい時間のあいだにすさまじく入り乱れる。

実際に見た者の話によると、鹿野は、どんなばあいにも進んで外側の列にならんだということである。明確なペシミストであることには勇気が要するというのは、このような態度を指している。それは、ほとんど不毛の行為であるが、彼のペシミズムの奥底には、おそらく加害と被害にたいする根源的な問い直しがあったのであろう。そしてそれは、状況のただなかにはあっては、ほとんど人に伝ええない問いである。彼の行為が、周囲の囚人に奇異の感を与えたとしても、けっしてふしぎではない。彼は加害と被害という集団的発想からはっきりと自己を隔絶することによって、ペシミストとしての明晰さと精神的自立を獲得したのだと私は考える。》

待遇が一般捕虜なみに切りかえられると、《人間として失ったもの》の一つひとつを取り戻していき、一年後、健康の回復後も精神は荒廃したまま、《およそ理由のない猜疑心と、隣人にたいする悪意》にほとんどの者が悩まされる中で、《鹿野の「奇異な」行動はますますはっきりして来た。毎朝作業現場に着くと彼は指名も待たずに、一番条件の悪い苦痛な持場にそのままついてしまうのである。たまたまおなじ現場で彼が働いている姿を私は見かけたが、まるで地面にからだをたたきつけているようなその姿は、ただ悽愴というほかなかった。自分で自分を苛酷に処罰しているようなその姿を、私は暗然と見まもるだけであった。》石原たちが《精神の 回復期 》をようやく脱け出し始めた頃、鹿野の絶食が起こり、周囲の説得もむなしく、絶食4日目の朝、石原は《いやいやながら一つの決心をし》て、鹿野に絶食の決意を伝えて作業に出かけ、夕方収容所に落胆して帰ってきて寝台にひっくり返っていると、彼がやってきて、《めずらしくあたたかな声で一緒に食事をしてくれという》。二人が無言のまま夕食を終えたその二日後、鹿野は絶食の理由を語る。

《メーデー前日の4月30日、鹿野は、他の日本人受刑者とともに、「文化と休息の公園」の清掃と補修作業にかり出された。たまたま通りあわせたハバロフスク市長の令嬢がこれを見てひどく心を打たれ、すぐさま自宅から食物を取り寄せて、一人一人に自分で手渡したというのである。鹿野もその一人であった。そのとき鹿野にとって、このような環境で、人間のすこやかなあたたかさに出会うくらいおそろしいことはなかつたにちがいない。鹿野にとっては、ほとんど致命的な衝撃であったといえる。そのときから鹿野は、ほとんど生きる意志を喪失した。

これが鹿野の絶食の理由である。人間のやさしさが、これほど容易に人を死へ追いつ

めることもできるという事実は、私にとっても衝撃であった。そしてその頃から鹿野は、さらに階段を一つおりた人間のように、いっそう無口になった。》

この絶食さわぎを収容所側は一種のレジスタンスとみて、鹿野を連日取り調べるが、自分の功績しか念頭にない施という中国人の上級保安中尉は根負けして、「人間的に話そう」と態度を変えて切り出す。《このような場面でさいごに切り出される「人間的に」というロシア語は、囚人しか知らない特殊なニュアンスをもっている。それは「これ以上追及しないから、そのかわりわれわれに協力してくれ」という意味である。協力とはいうまでもなく、受刑者の動静にかんする情報の提供である。

鹿野はこれにたいして「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない。もし私が人間であるなら、あなたは人間ではない。」と答えている。取調べが終ったあとで、彼はこの言葉をロシア文法の例題でも暗誦するように、無表情に私にくりかえした。》

仲間を売れと強要する取調べ官にむかって、「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない。もし私が人間であるなら、あなたは人間ではない。」と答えることは、言葉だけを聞き取るなら、強制収容所の管理者の立場に立って圧倒的に弱い立場にある受刑者の動揺に付け入るようにスパイを強要する、という卑劣さを告発しているように響く。つまり、「もし私が人間であるなら、あなたは人間ではない。」という部分のみが強く聞こえてくる。現に、関川夏央は金正日が人間であるなら「私は人間ではない」とは いわずに、「私がもし人間だとするなら、金正日は人間ではない」というように鹿野の言葉を聞き取っており、金正日の非人間性を告発するために鹿野の言葉を持ち出していることがわかる。

だが鹿野の言葉が告発の調子を帯びていないことは、「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない。」という部分を含んでいることから明らかだ。関川夏央が聞き取ったように、その言葉にもし告発がいくらかでも感じられたなら、それが30年もの間、私の心の襞に棘のように突き刺さっていることはなかった。鹿野が告発から最も遠いペシミストであったが故に、そんな言葉を発する彼の場所というものがこれまでずっと定かでない問いを私に発しつづけてきたのである。石原もこういう。《その時の鹿野にとって、おそらくこの言葉は挑発でも、抗議でもなく、ただありのままの事実の承認であったろう。(中略)私には、そのときの鹿野の表情がはっきり想像できる。そのときの彼の表情に、おそらく敵意や怒りの色はなかったのであろう。むしろこのような撞着した立場に立つことへの深い悲しみだけがあつたはずである。》

いまははっきりと私にはこの言葉がみえてくる。おそらく鹿野がいおうとしたのは、「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない」ということだった。あとの一行は付け加えられたにすぎなかった。取調べ官は紛れもなく人間そのものであった。人間だからこそ、彼はたえずよりよく生きのびることのできる側を歩きつづけて、強制収容所の取調べ官の立場を確保してきた。行進中に生きのびるために、「囚人は争って中間の三列へ割りこみ、身近にいる者を外側の列へ押し出そうとする」のも、人間ならばこそであり、そのような囚人もまた、「他人よりもながく生きのこる」という発想をとることに

において取調べ官とつながっていたのだ。したがって、その発想を捨て去った鹿野のほうこそが「人間ではない」。もちろん、彼は非人間的ではない。人間的であることと非人間的であることの双方の立場から離陸した「脱人間的」な場所に立って、彼は「むしろこのような撞着した立場に立つことへの深い悲しみ」を感じとっていたのだ。

《私が知るかぎりのすべての過程を通じ、彼はついに 告発 の言葉を語らなかった。彼の一切の思考と行動の根源には、苛烈で圧倒的な沈黙があった。それは声となることによって、そののっぴきならない真実が一拳にうしなわれ、告発となって顕在化することによって、告発の主体そのものが崩壊してしまうような、根源的な沈黙である。強制収容所とは、そのような沈黙を圧倒的に人間に強いる場所である。そして彼は、一切の告発を峻拒したままの姿勢で立ちつづけることによって、さいごに一つ残された 空席 を告発したのだと私は考える。告発が告発であることの不毛性から究極的に脱出するのは、ただこの 空席 の告発にかかっている。》と石原は書く。空席 とは、鹿野が脱人間的な場所へと赴くことによって、彼自身に空いている人間としての場所にほかならない。

当然ながら、取調べ官には彼の 空席 がみえなかったから、彼の絶食を執拗に追及し、「人間的に話そう」としたのだが、「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない。」と答えることによって、彼はもはや取調べ官の言葉が届かない「人間ではない」場所へと離脱していることを告知していた（だけのことな）のだ。したがって、あとの一行も人間としての場所から離脱してしまった、そんな「私が人間であるなら、あなたは人間であることはできない」という謂にほかならなかった。つまり、鹿野は取調べ官にむかって、あなたが話しかけようとする場所に自分はすでにいないという、「ただありのままの事実」を伝えにすぎなかった。ただそういわざるをえなくなることもまた、彼にとって「深い悲しみ」を伴っていたなら、彼が取調べ官にむかって発した言葉は、本当は「さいごに一つ残された 空席 」にむかってこそ、発されていたことに気づく。

《バム地帯での追いつめられた状況のなかで、鹿野をもっとも苦しめたのは、自動小銃にかこまれた行進に端的に象徴される、加害と被害の同在という現実であったと私は考える。そして、誰もがただ自分が生きのこることしか考えられない状況のなかで、このようないたましい同在をはっきり見すえるためにも、ペシミストとしての明晰さを彼は必要としたのである。

おそらく加害と被害が対置される場では、被害者は 集団としての存在 でしかない。被害においてついに自立することのないものの連帯。連帯において被害を平均化しようとする衝動。被害の名における加害的発想。集団であるゆえに、被害者は潜在的に攻撃的であり、加害的であるだろう。しかし加害の側へ押しやられる者は、加害において単独となる危機にたえまなくさらされているのである。人が加害の場に立つとき、彼はつねに疎外と孤独により近い位置にある。そしてついに一人の加害者が、加害者の位置から進んで脱落する。そのとき、加害者と被害者という非人間的な対峙のなかから、はじめて一人の人間が生まれる。人間 はつねに加害者のなかから生まれる。被害者のな

かからは生まれぬ。人間が自己を最終的に加害者として承認する場所は、人間が自己を人間として、ひとつの危機として認識しはじめる場所である。

私が無限に関心をもつのは、加害と被害の流動のなかで、確固たる加害者を自己に発見して衝撃を受け、ただ一人集団を立去って行くその うしろ姿 である。問題はつねに、一人の人間の単独な姿にかかっている。ここでは、疎外ということは、もはや悲惨ではありえない。ただひとつの、たどりついた勇気の証しである。

そしてこの勇気が、不特定多数の何を救うか。私は、何も救わないと考える。彼の勇気が救うのは、ただ彼一人の 位置 の明確さであり、この明確さだけが一切の自立への保証であり、およそペシミズムの一切の内容なのである。単独者が、単独者としての自己の位置を救う以上の祝福を、私は考えることができない。》

強制収容所における「自動小銃にかこまれた行進」とは、いうまでもなく受刑者という被害者の集団による行進にほかならない。しかし、この被害者の集団内でも「他人よりもながく生きのこる」という原理が冷徹に貫かれているために、というよりもその日一日生きのびることが最優先課題となっている被害者の集団であるからこそ、より一層誰もが「他人よりもながく生きのこる」ことに敏感になっている。当然、そこに生への執着をめぐる競争が生まれる。自分が今日一日生きのびる分、他の誰かは今日一日生きのびられなくなっている。だが明日は逆に、誰かが生きのびる分、自分は行きのびられなくなっているかもしれない。強制収容所の囚人は誰もが、そのような「加害と被害の同在という現実」にたえまなく晒され生きている。おそらく加害と被害が同在する現実の中では、人々は加害を明晰に意識することはない。なぜなら、加害を意識することは苦痛であり、その苦痛を被害の意識において打ち消そうとすることによって、やはり「他人よりもながく生きのこ」ろうとするからだ。

加害と被害は同在しているから、加害者意識はどうしても被害者意識に覆い被されやすくなってしまふ。被害者意識は自分自身とけっして対立しないからだ。そこで石原がいうように、被害者は必然的に「集団としての存在 でしかな」くなり、たやすく多数派を形成してしまふ。しかし人は加害を意識することにおいてしか、自立することはない。加害者の位置に立ってしまうことを、被害者の位置にも立ちうることがあるということによってけっして相殺しないとき、つまり、加害者の位置に立ってしまったことをあくまでも加害者の位置に立ってしまったこととして自分に向き合わせるとき、彼は加害と被害が同在する現実の外へ出ようとする。「他人よりもながく生きのこる」収容所とは別の状況に立とうとする。それは、「他人よりもながく生きのこらない」状況へとつねに自分の身を置くことによって貫徹されようとする。「そのとき、加害者と被害者という非人間的な対峙のなかから、はじめて一人の人間が生まれる。人間 はつねに加害者のなかから生まれる。」と、石原はいう。

「加害と被害の流動のなかで、確固たる加害者を自己に発見して衝撃を受け、ただ一人集団を立去って行くその うしろ姿 」に石原が見出すのは、徹底した単独者の位置である。そこに凜然としているのは、「ただ彼一人の 位置 の明確さであり、この明確

さだけが一切の自立への保証であり、およそペシミズムの一切の内容なのである」と石原はいいきるが、その単独者としての「位置の明確さ」はまた、加害と被害が流動する集団の現実に拮抗しえている明確さでもあるということを付け加えておかなくてはならない。鹿野武一にみられるような単独者としての「位置の明確さ」は、彼が必ずしも意図していないにもかかわらず、加害と被害が流動する集団の現実を無化してしまっているからだ。

《帰国した翌年、鹿野は心臓麻痺で死亡した。狂気のような心身の酷使のはての急死であった。彼はさいごまで、みずからに休息をゆるさなかったのである。》と石原は追記に記すが、鹿野武一の存在を単独者としての「位置の明確さ」に引き絞って、彼が取調べ官に答えた言葉をみていくなら、あなたに単独者としての位置は垣間見られないから、「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない。もし私が人間であるなら、あなたは人間ではない。」と告げているように聞こえる。敢えて付け加えるなら、だから、あなたと私は永遠に交差しないだろうということであった。石原が想像するように、「その時の鹿野にとって、おそらくこの言葉は挑発でも、抗議でもなく、ただありのままの事実の承認であった。》

活字にされている言葉をそのままピンセットで取り出してくることがいかに間違っているかという明確な例証を、関川夏央はさらけだしてしまった。どうして彼は拉致問題という「北朝鮮の国家テロ」を糾弾するのに、よりによって鹿野武一の言葉を持ち出してしまったのだろう。もし彼が鹿野の言葉を思い浮かべたのであれば、その言葉がどういう状況下で発され、石原吉郎がどのように反芻しながらその言葉を書き留めたのか、を視野に入れなくてはならなかった。もちろん、石原の文章をもう一度読み返すなら、自分がふと想起した鹿野の言葉を外に持ち出さずに、自分の思念の奥深くに沈潜させた筈だ。だが関川夏央は石原の文章を紐解きはしなかった。そして鹿野の言葉のみを取り出して、「私がもし人間だとするなら、金正日は人間ではないのである。私たちが人間の集団なら、労働党は人間の集団ではないのである。」というように、鹿野の言葉を改ざんしてしまったのだ。

いうまでもなく関川夏央の文章に鹿野の言葉が引用されなくてはならない余地は皆無であったし、関川夏央にしても鹿野の言葉を持ち出す必然性は皆無であった。もしいいたければ、金正日、労働党を異常な人間、異常な人間の集団とこれまでみなしてきたが、拉致問題以降、彼らは異常な人間、異常な人間の集団ですらなくなった、といえは事足りただけのことであった。本当に鹿野武一の言葉がこんな場所に引きずりだされてくること自体が不思議なのだ。彼は鹿野の言葉の真意を理解しようとしていないだけではない。根本的に欠落しているのは、鹿野の言葉をもし口にしたら、鹿野の言葉が発されたのと同じ状況下に我が身を置かない限り、不可能であるというシビアなまなざしである。関川夏央が労働党管理下の収容所にずっと入れられて、金正日の前に引き出されたときに、面前で「もしあなたが人間であるなら、私は人間ではない。もし私が人間であるなら、あなたは人間ではない。」と答えるときにのみ、鹿野の言葉は身をもって甦

ってくるのであり、鹿野や石原が直面しつづけてきた状況下からそのことばのみをくり抜くのは、言葉の死体を陳列しているに等しい。

これは、関川夏央に対する怒りや抗議であるよりも、引用を駆使する私自身への自戒としていっている。それに、思いも寄らなかったところで、たとえ死体であろうとも、鹿野の言葉を目にして、改めて石原の文章を再読し、思考を辿り直していく機会を与えてくれたことへの感謝の気持もある。もう少しいえば、そこで鹿野の言葉らしき言葉をみて足を止めなければ、拉致問題に関する全く別の文章を書くつもりであった。そのために関川夏央の文章を取り出してきたのである。もちろん、その文章の中にある鹿野の言葉に足を止めて石原の文章にまで遡及しようとしたのは、これまでに言及してきた別の角度から拉致問題に切り込もうとする私自身の中に、漠然とした不安が大きいかかえこまれていたからである。その不安な視点をより明確にしたいという欲求が私にはあった。石原の文章を再読することによって、その不安な視点が被害 - 加害的発想に深くかかわっていることが確かめられたように思われる。

加害と被害が同在する現実の中で自立しようとするなら、被害者として形成される集団から離脱して、加害の側に立っている自分を直視することにおいてしかありえない。

「人が加害の場に立つとき、彼はつねに疎外と孤独により近い位置にある。そしてついに一人の加害者が、加害者の位置から進んで脱落する。そのとき、加害者と被害者という非人間的な対峙のなかから、はじめて一人の人間が生まれる。人間はつねに加害者のなかから生まれる。被害者のなかからは生まれぬ。」その人間とは徹底した単独者としての姿であり、「ただ彼一人の位置の明確さ」がそこに刻まれていると石原はいう。ただそれだけのことであって、「不特定多数の何」かを救うわけではない、と彼はなんの気負いもなしに淡々と語るが、人は自分の位置をかたちづくりながら生きていくことを考えるなら、「ただ彼一人の位置の明確さ」は、その位置に否応なしに接触する者たちの位置のありようをもくっきりと浮かび上がらせてしまう。

《いまにして思えば、鹿野武一という男の存在は私にとってかけがえのないものであった。彼の追憶によって、私のシベリヤの記憶はかろうじて救われているのである。このような人間が戦後の荒涼たるシベリヤの風景と、日本人の心のなかを歩いて行ったということだけで、それらの一切の悲惨が救われていると感ずるのは、おそらく私一人なのかもしれない。》と石原は締め括るが、シベリヤとは異なる別の記憶を生きつづけている私にも、石原吉郎の文章の中で鹿野武一が単独者として明確に示した位置は、驚きと無視できぬ力を伴って強く迫ってくるのが感じられる。もしかすると誤解しているのかもしれないが、私が拉致問題についてなにかを記すときの不安な視点とは単独者としての「位置の明確さ」の度合いにかかわってくるものであったと思う。拉致問題もまた、加害と被害が同在する現実のなかでの出来事にほかならなかった。自らの被害をもって加害を撃つという場所の不毛さを断ち切るためには、その場所からどこまで脱け出すかにかかわっており、単独者としての「位置の明確さ」に貫かれた言葉が今後待たれているにちがいない。

2002年12月30日記